



**Data** 2024-82

監督・脚本: マキシム・ラッパズ  
出演: ジャンヌ・バリバル/トマス・サーバツハー/ピエールニアントワヌ・デュベ/ヴェロニク・メルムー/アドリアン・サヴィニー

## 👁️👁️ みどころ

女の子は少女から女に、そして結婚して妻になると、今度は子供を産んで母親に。「女の一生」はそんな時系列だが、本作の主人公・クローディーヌが見せる女の顔と母の顔（の二面性）は如何に？

思わせぶりのタイトル（？）の舞台は、アルプスの心臓部ともいわれる美しい山々が広がるスイスのヴァレー地方。毎週火曜日に、白いワンピース姿の主人公が登山鉄道とロープウェイを乗り継いでホテルに入るのは何のため？

十代の純愛モノも悪くはないが、女の性的欲望を大前提にした大人のラブストーリーはもっと良い。下手すると売春スレスレ、ヤクザ絡みになると全く別のヤバイ物語になってしまうが、幸いクローディーヌの“お相手”はいい男ばかりだからご安心を！主演女優の美しさと演技力にも注目だが、1986年生まれの男性監督マキシム・ラッパズにも注目！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■知らないなあフランスのこの女優！本作のテーマは？■□■

フランスの女優といえば、今では『エル ELLE』（16年）（『シネマ 40』31頁）、『私がやりました』（23年）（『シネマ 55』114頁）のイザベル・ユペールを真っ先に思い浮かべる。12/13から公開される彼女の最新作が『不思議の国のシドニ』（24年）だが、本作に出演したフランス人女優ジャンヌ・バリバルも、『ボレロ 永遠の旋律』（24年）等で有名な。調べてみると、私は彼女の主演映画を、『COLD WAR あの歌、2つの心』（18年）（『シネマ 45』214頁）や『幻滅』（22年）（『シネマ 53』122頁）、『MEMORIA メモリア』（21年）（『シネマ 50』75頁）等で見ているが、残念ながら全然覚えていない。

しかし、背後から男性に抱かれてうっとりとした表情を浮かべている彼女を写し出したチラシの写真と、そこに書かれている「心の結び目がほどこけていく」の言葉を読むと、こ

れはなかなかの女優、そしてなかなかの物語？しかも、『山逢いのホテルで』といういかにも意味深な(?)邦題と、「スイス・アルプスの山間に実在するホテルを舞台に 献身的な愛と逃避の夢の間で揺れる大人のラブストーリー」というキャッチコピーを読むと、本作のテーマは、大人の女性の不倫もの??

## ■□■『たまゆらの女』は週2回、クローディーヌは火曜日■□■

私は中国の美人女優、コン・リー(鞏俐)が大好き。チャン・イーモウ(張芸謀)監督の最初の“イーモウガール”たる彼女は、1980年~90年代の『紅いコーリャン』(87年)『シネマ5』72頁、『菊豆』(90年)『シネマ5』76頁、『古井戸』(87年)『シネマ5』79頁)等で、“中国ヌーベルバーク”と第5世代監督の躍進を支えたが、スン・チョウ(孫周)監督の『たまゆらの女』(03年)『シネマ5』245頁)では、中国映画には珍しく官能的な役と演技でコンリー・ファンを魅了した。詩人に尽くすヒロインの愛と、そんな彼女を思い続ける若い獣医が織りなす三者三様の愛の姿を描いた同作で、コンリーは、雲南省の昆明と四川省の重慶を結ぶ片道10時間の「火車」による長距離恋愛のヒロイン役を、匂うような美しさで見事に演じていた。それに対して、本作冒頭では、スイス南部のマッターホルンなど数々の名峰を有し、アルプスの心臓部とも言われるヴァレー地方にあるホテル・デュ・バラージュを舞台に、山間を走る登山鉄道とロープウェイを乗り継ぎ、大きなダムのはつりを歩いて向かうクローディーヌの姿が映し出されるので、それに注目!

ジャンヌ・バリバル演じるクローディーヌは、毎週1回、火曜日に白いワンピースを身に纏い、一人でこのホテルに向かうようだが、それは一体何のため?そう思っていると、クローディーヌは顔なじみのフロント係のナタンにチップを渡して、レストランに座っている男性客について、「〇〇は一人?」等の質問をし、ナタンから「明日もしくは明後日に出発する独身の男性」だとの回答を得ると、一人でそのテーブルに近づいて行ったからビックリ!彼女の年も決して若くはないから、男性客は当然50~60代だが、「座っていいかしら」と言われて断る男はいないはずだ。

そこで、彼女は「どこから来たの?」「あなたの住んでいる町の様子を聞かせてほしい。」と切り出し、ひとしきりの会話が終わると、今度はズバリ、「部屋に行かない?」と直球を投げ込んだから、アレレ、アレレ・・・。これはすごい。もちろん、これは現実にはありえない設定。100歩譲って、もしこんなおいしい話(?)が現実には飛び込んでくれば、「ひょっとして、これは美人局(つつもたせ)?」「これはハニー・トラップ?」と警戒しつつ、男なら誰でもその誘いに応じるはずだ。しかし、フィクションを前提とした映画なら、何でもあり!「コトを終えた後」のクローディーヌは、セックスの悦びに満喫したようだし、思いがけない幸運に喜んだ男性客は喜んで財布から金を出そうとしたが、それすら「いけない」と言われたから、これで何の後腐れもなければ超ラッキーだ。もちろん、部屋に向かう時から、これは一時のアバンチュールであることを暗黙の了解としているから、コトが終わった後、互いの名前や住所、電話番号を聞いたりしないのも鉄則だ。したがって、

クローディーヌが服を着て部屋から出て行ってしまえば、もはやこの2人の男と女は何の縁もゆかりもないことに。なるほど、なるほど・・・。

本作冒頭、1回目の火曜日はその一部始終が丁寧に描かれ、2回目、3回目の火曜日になると少しずつ省略されていくが、毎週火曜日のクローディーヌのホテル・デュ・バラージュにおけるアバンチュールの全貌はそれで十分明らかに。しかし、彼女は一体なぜそんなことを？そもそも彼女は何歳なの？そして仕事は？夫や子供は？

## ■□■女の顔 vs 母親の顔！火曜日以外の彼女は？■□■

クローディーヌが毎週火曜日に訪れるホテル・デュ・バラージュは、高さ285m、長さ695mにも及ぶ世界最大級のグランド・ディクスンス・ダム（標高2,160m）に位置する伝統的なホテルだ。私が生涯の「ベスト1」映画としている『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）では全編にわたってアルプスの美しい山々の風景が広がっていたが、本作に見るホテル・デュ・バラージュと、グランド・ディクスンス・ダムの風景も素晴らしい。

それに対して、クローディーヌの住居は低位置の町にあるらしい。そして、仕立屋として生計を立てているクローディーヌは、障害のある息子バティストを火曜日だけ隣家のおばさんのシャンタル（ヴェロニク・メルムー）を雇って介護してもらっていたから、いややクローディーヌの“表の顔”と“裏の顔”の違いにビックリ！しかも、あのホテルでのアバンチュールの前に男性客から聞いたあの街の情報、この街の情報は、「時々海外から届く父親からの手紙」としてクローディーヌの手によってでっち上げられ、それを行きつけのカフェで息子バティストに読み聞かせていたから、アレレ、アレレ・・・。なるほど、こうすれば手紙の内容がいつも新鮮になるというメリットはあるだろうが、そんな情報収集はいつまで安定的に続くの？

本作を見ている限り、毎週火曜日にホテル・デュ・バラージュでクローディーヌが、ナタンの協力を得て見つけるアバンチュールのお相手はいい人ばかりだが、10人のうち1人くらいは部屋の中で2人きりで裸になり、ベッドに入れば豹変するアブノーマルな男がいる危険も・・・。さらに、弁護士の忠告を付け加えれば、顔なじみのナタンが多額の報酬に目が眩み、ツメをのばした挙句、ヤクザのような客と結託してヤバイ男をクローディーヌに紹介するリスクもある。本作冒頭に見るような後腐れのないアバンチュールの成功例が5回も10回も続くと思うのは大間違いだ。本作中盤、少しずつそんな心配が大きくなってきたが・・・。

## ■□■男性客からワインが！これはナニ？その後の展開は？■□■

いつものように火曜日にクローディーヌがホテル・デュ・バラージュに入ると、ナタンが「お客様からです」と言いながらワインを運んできたから、アレレ。いつもは自分が男性客の値踏みをしていたのに、今日は自分が男性客から値踏みされていたらしい。その男はドイツ人のミヒャエル（トマス・サーバッハー）。彼はダムのほとりで写真を撮っている際に、クローディーヌの姿を目にしていたらしい。ホテル・デュ・バラージュにお

ける男漁りのアバンチュールも数回だけならいいが、火曜日ごとの定例となり、その都度ナタンに協力してもらってれば、何かと情報が漏れてしまうリスクがある。そして、もしその情報の漏れが警察に通報されていたら、クローディーヌは売春防止法違反で逮捕？あるいはヤクザに漏れていたら、クローディーヌは危険な立場に？

悪く考えればいくらでもやばい事態が想定できるし、それはそれで一つのストーリーとして成立する映画だが、「性善説」に立つ(?)本作では、ダムのみで写真を撮っていた男は、「ハンブルグに住む水力発電の研究者だ」と自己紹介したから、ひとまずヤバい男ではなさそうだ。彼から提供されたワインを飲みながら、ごくわずかの会話を交わしただけで、それを確信したクローディーヌは、当然のように2人でミハエルの部屋に入り、当然のように服を脱ぎ、当然のようにコトに臨むことに。そして、いつものように満足したクローディーヌは「ありがとう」と礼を言って、もちろん金の授受をすることなく部屋を出ていったが、さて2人の関係はこれでジ・エンドに?それとも・・・?

### ■□■1日限りの原則が大切!それが破られると・・・?■□■

クローディーヌが毎週火曜日に白いワンピースを着てホテル・デュ・バラージュでやっていることは、はっきり言えば、ナタンの協力を得て、後腐れのない男性客を選定しての、男漁り!そこで大切なことは、金を要求していないし、男が「払う」と言っても受け取らないから売春ではなく、あくまでその場限りの自由恋愛に基づく性交渉ということだ。したがって、翌日もしくは翌々日に男性客がホテルを離れ、2度と会う可能性が消滅してしまえば、文字通り「後腐れのない1回限りの性交渉」で終わるわけだが、2度3度と逢瀬が重なってくると・・・?

本作中盤、いつものようにクローディーヌがダムを通りかかると、ダムの写真を撮っていたミハエルから、「また君に会えて嬉しい」と言われ、広大なダムを前に抱き合う姿が登場するので、それに注目!しかし、毎週の決まった行動ではなく、こんな想定外の展開はまずい。現に想定外の逢瀬を楽しみ、つつい帰りが遅くなってしまったクローディーヌは、隣家に置き去りにされた息子バティストから、「ママは僕を忘れたんだね。」と言われてしまったから、チョーヤバイ。隣人のおばさんを即座にクビにしたものの、クローディーヌの心の中は罪悪感で苛まれることに。

### ■□■反省して男漁りを中止?イヤ事態は逆の方向に!■□■

人間は誰にでも誤りがあるもの。孔子の有名な「ことわざ」に、「過ちては改むるに憚ることなかれ」があるが、これは、その過ちを是正さえすればそれでOKという意味だ。そう考えれば、クローディーヌがあの日のことを反省し、火曜日毎のホテル・デュ・バラージュでの男漁りを中止すればそれで万事OKだが、事態は逆の方向に進んでいくから、アレレ、アレレ。クローディーヌは息子を施設に預けてのホテル通いを続けたから、クローディーヌのことを忘れられずにホテルでの滞在を伸ばしていたミハエルとの逢瀬が増えた上、ミハエルから「アルゼンチンの仕事を引き受けた。一緒に来ないか。」とまで言わ

れたから激しく動揺することに！

ウォン・カーウァイ（王家衛）監督の『ブエノスアイレス』（97年）（『シネマ5』234頁）は、香港の二大俳優、トニー・レオンとレスリー・チャンを主演として、男同士の同性愛の姿を描いたが、それはアルゼンチンの首都ブエノスアイレスが、香港から最も遠いところだからこそ成立した物語。つまり、狭い香港の束縛から離れて、2人は自由な土地に自由に飛び込めたわけだ。スイスからブエノスアイレスも同じようにメチャ遠いから、ここでクローディーヌが本当にスイスから逃げていけば、『ブエノスアイレス』と同じような異例の物語になるかもしれないが、彼女は即座に「ムリよ」と返事したのは当然だ。ところがその後、バティストに彼が大好きな歌手ジョニー・ローガンの衣装を真似たスーツを仕立ててやったり、施設で見かけた女の子をバティストが気にしていることを知りつつ、「施設に泊まるのはどう？」とそれとなく尋ねるクローディーヌの姿を見ていると、アレレ、アレレ・・・？これはひょっとして、バティストを施設に預け、自分は1人でミヒャエルと共にブエノスアイレスに行くつもりなの・・・？まさか、まさか・・・？

## ■□■女ゴゴロは不可解！？本作の結末は如何に？■□■

私は本作で女の顔と母親の顔を見事に使い分けたフランス人女優、ジャンヌ・バリバールをはじめじっくり鑑賞したが、イマイチ美人と言えないところが残念だ。彼女は1968年生まれだから、実年齢は50代後半。本作でのクローディーヌの年齢は明確にされていないが、息子のバティストは10代後半だから、40代でも決しておかしくはない。むしろ、火曜日毎にホテル・デュ・バラージュに行き、積極的に男漁りを重ねているのだから、40代の設定が最も妥当だ。すると、残念ながらジャンヌ・バリバールは少し年を取り過ぎている感がある。ベッドシーンで大胆に見せてくれる上半身だけのヌード姿はそれなりに魅力的だし、顔もスタイルもそれなりのものだが、残念ながら私にはイマイチ女性としての美しさは感じられない。

ちなみに、本作を鑑賞した12/7に、女優兼歌手である“ミポリン”こと中山美穂が54歳で亡くなったとのニュースが流れたが、ほぼ同年代の2人を比べると、断然ミポリンの方が魅力的だ。それはあくまで私の感覚であり意見だが、本作ラストに見るクローディーヌの決断は如何に？

2024（令和6）年12月9日記